

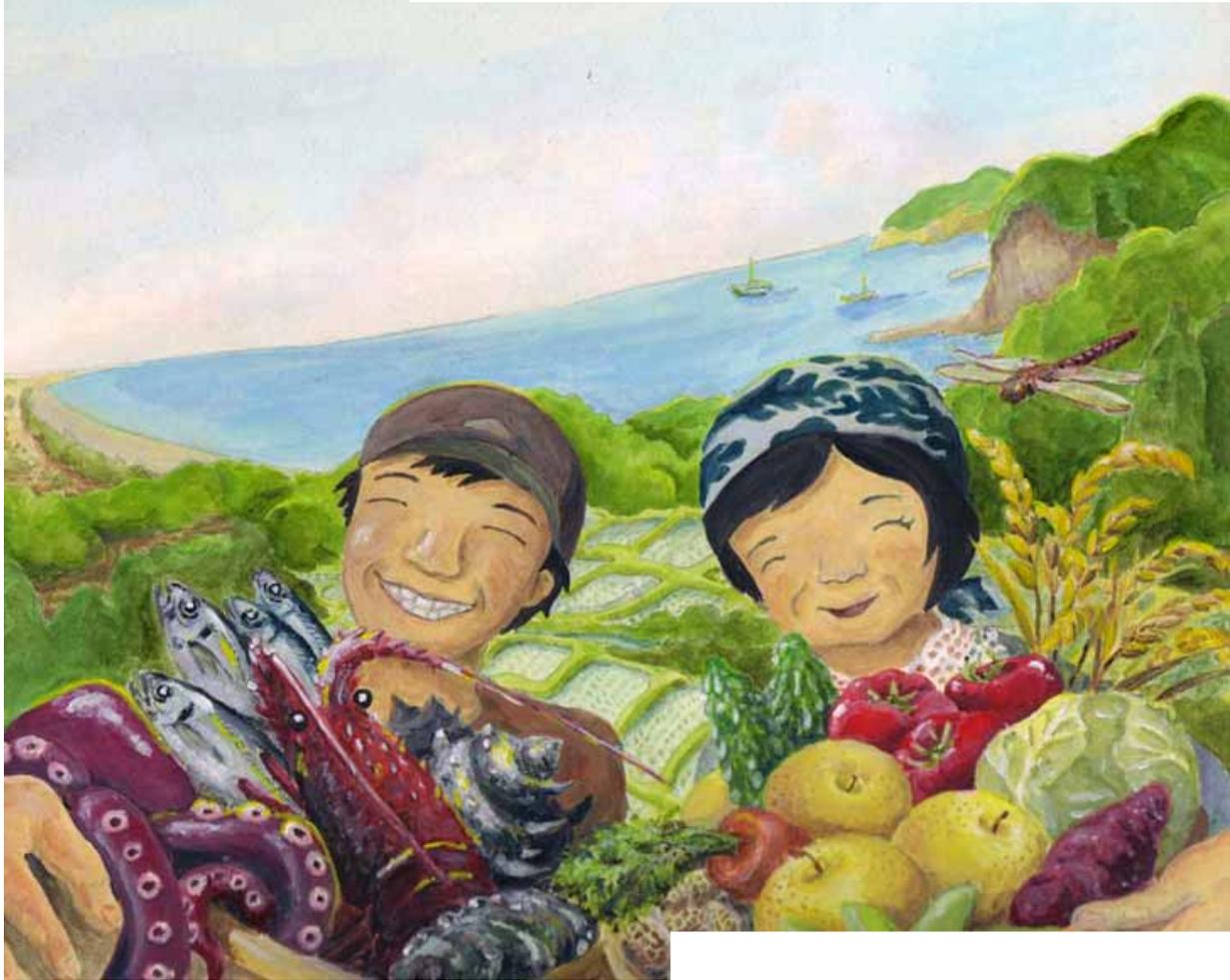
里山に託す私たちの未来
第8回里山シンポジウム



2011年テーマ

里山 里海と食

いすみ
～夷隅の根っこから元気に～



2011年テーマ

里山は、多くの生きものの命のゆりかごでもあり、命のにぎわい（生物多様性）が見られる場所です。しかしながら、オーバーユース（資源の過剰摂取）とアンダーユース（手入れ不足）の同時進行によって、極めてアンバランスな状態に置かれています。その結果、里山の荒廃と消失が進んでしまいました。

今年度の全体会は、里山からの恵みを「食」という切り口から考え、私たちの暮らしに欠くことができない地域の資源の価値を再確認し、地元力の見直しを進めたいと思います。

さらにその上で、里山に新たな価値創生もたらすような、新しいライフスタイルの創出や、自由な天地求めて移り住む若者たちの動きについても考えてみたいと思います。

主催 里山シンポジウム実行委員会 千葉県 NPO 法人ちば里山センター
共催 いすみ市
後援 御宿町 NPO 法人千葉自然学校

全体会プログラム

2011年5月23日

いすみ市夷隅文化会館

(敬称略)

- 9:30~10:00 受付
- 10:00 開会・挨拶 (総合司会)
里山シンポジウム実行委員会
千葉県森林課
いすみ市副市長 (市長代理)
- 代表 鈴木 優子
金親 博榮
課長 向後 宏保
渡辺 雅文
- 10:20 基調講演者の紹介 金親 博榮
- 10:30 基調講演
「やればできる2億から75億への成長の軌跡」
富里市農業協同組合常務理事 仲野 隆三
- 11:45~13:30 昼食・休憩・ポスターセッション
- 13:30 車座意見交換会
- 1 農林水産業の6次産業化をどう具体化するか 金親 博榮・田中 収
2 いすみの食材があふれる食卓 佐藤 聡子・中村 松洋
3 里山景観と森と海・グリーンツーリズムに必要なこと 栗原 裕治・伊藤 幹雄
4 耕作放棄地と遊休農地の再生と 木下 敬三・中村 俊彦・林 みね子・戸張 七重
5 新しい里山の価値の創出
(オーガニック、ウーファー、サーファー) 自由な天地を開く若者たち
手塚 幸夫・松永 美知子・鈴木 優子
- 15:00 全体会総合討論とまとめ 手塚 幸夫
- 15:50 分科会の報告 事務局 荒尾 稔
- 16:00 閉会の挨拶 副代表 栗原 裕治

主催者ご挨拶

里山シンポジウム実行委員会 代表 金親博榮

主催者としてのご挨拶をいたします。

本日第8回里山シンポジウムにご参加をいただきありがとうございました。昨日に引き続き参加をいただきました方々もおられますが、いすみ市はほとんどが観光目的でいらっしゃる方も多いと思います。今回はこのシンポジウムへご参加をいただく目的でおこしくださいました方々も多いと思います。思い感謝いたしております。

まずは、今回の開会に先立ちまして、東日本大震災によって被災し、亡くなられた多くの方々に、黙とうをささげ、冥福を祈りたいとおもいます。どうぞご起立下さい。
(1分間の黙とう)



今回で、8回目を迎えます本シンポジウムは、2004年、千葉県里山条例の施行を期してスタートしたものです。条例は市民の里山保全の意欲を、里山を提供する地主の意思に合致させ、2者間での利用協定を県が認定し、資金面でも支援し、そして安定的、継続的な里山の活動を担保し、活発な市民活動を里山に引きいれようとしたものです。そういった趣旨でございます。

その中で個々の里山支援団体が活動しやすいようにと中間支援組織として、ちば里山センターが設立され、毎年活発化しており、現在では100団体以上が県内から参加をいただいております。

本シンポジウムは、毎回、分科会とその集大成のごとき全体会で構成されています。

分科会は5月18日を里山の日と定めたことから、この期日の前後に合わせてたくさんの分科会が開かれてきました。

これら一連の里山シンポジウムや分科会活動が、全国的にも「里山の千葉県」ということで評価も高くなっていると聞いております。その中で、全体会は第1回が木更津市、2回が我孫子市、3回が八千代市、4回が東金市、5回が千葉市、6回が佐倉市、7回は市川市で開催してまいりました。

各々の自治体や大学などのご支援をいただき、「里山に託す私たちの未来」を共通のテーマとしまして、「里山と子ども」、「里山とゴミ」、「里山となりわい」、「里山と命のにぎわい」、「里山と食料・水・木材」、今回は市川市でしたので「里山と都市」というテーマを掲げて里山の色々な問題や魅力を、様々な角度から切り込んで議論してきました。

今回はいすみ市にお世話になってこの会が開催されるわけですが、里山里海の保全再生は、まずそこに住む人々が、まず地域の素晴らしい資源を認識しなければならない。地域のことが分かっているのが地域の人。そんな風に私自身が感じていますけれども、この資源をいかに持続的に活用して「なりわい(事業ですね)」に結びつけていくかが問題解決の一つの回答になるかという結論を得ることになりました。夷隅郡市では、地元の農業や漁業に携わる方々だけでなく、新しくこの地に移り住んだ方々も地域の恵みを生かして、新しい仕組みを始めておられると聞いております。

この件については今日、車座分科会の中でも新しい方々がいらして、意見を聞かせていただくと

いう機会も作ってございます。この機会に学び、体験し、楽しみ、食を体験する、素晴らしいいすみ市を発見いただき、持ち帰っていただくことを皆様に期待するものであります。

また、東日本大震災では原子力発電所の事故のこともいまだ収束のめども立っていない、と、そんな風に困った状態になっていますけれども、自然の脅威と人の存在、人知のはかなさとか、日常生活の尊さなど、家族や友人の大切さ、食糧、燃料、水、空気、エネルギー源と消費の存在。過疎と過密の問題、短期的な戦略と長期的な損益をどのように考えるかとか、それから分散と集中の是非、経済的な合理性がどんなものか、そういったことにまで思いをはせる。片方では文明の力、科学の力、技術への過信と限界、そういったことまで及んでしまったわけです。

結局のところ、地域のボランティアやコミュニティが大切であると。地域の人々の知恵が大切であるという事が、これらをすべて包含して私どもに生き方が問われていると、そのような機会になってしまったと、そんな感じを思っている方々が多数おられると感じております。

その中で、人は自然によって活かされてきたと、緑の森林、田や畑、豊かな里山や里海によって生かされる。安らぎを得てきたという事です。山から川へ、川から海へ、間断なく連らなる、このいすみの自然を断ち切ることなく守り育てて、子や孫へひき継がなければいけない。そのような思いで私どもはこのような企画をして参りました。

今回のテーマは「里山里海と食」ということにしていますが、これは震災前からずーと話をしてきたところ、計らずも今回の食の大切さ、食の怖さ偉大さをテーマにしてしまうことになりました。

「今だからこそ」という事で、この自然といかに付き合うか、里山の恵みをどう生かすかということ、もう一度この夷隅郡市の地で考えてみていただきたいと、そんな風に考えています。

最後に、本日のスケジュールですけれども、生物多様性とこれを支える里山については、昨年10月名古屋で開催されたCOP-10(生物多様性条約第10回締約国会議)で討議をされました。そして、里山里海の重要性が改めて世界に発信されました。

そしてこれらを支えるボランティア活動は「出来る人が、できる時に、できるだけ的事をする」ということで、その大切さを改めて噛みしめたいと思います。ローカルな活動をグローバルにつなげる、その双方ともに欠かすことのできない車輪の一部であろうと自負しております。

本日は、仲野隆三先生の基調講演に学び、日本の、千葉県のローカルを担う心意気で本日の会を活用いただきたいと思っております。

講演の後、5つの「車座意見交換会」を予定しています。それぞれのテーマは、「農林水産業の6次産業化をどう具体化するか」「いすみの食材があふれる食卓」「里山景観と森と海・グリーンツーリズムに必要なこと」「耕作放棄地と遊休農地の再生と」「新しい里山の価値の創出（オーガニック、ウーファー、サーファー）自由な天地を開く若者たち」です。膝を突き合わせ、とことん議論して、先生にもう一度質問をしたいという事を含めて、お時間を取りました。実りあう結果が得られますよう期待しております。

今回いすみ市、御宿町のご協力の元、NPO 法人千葉自然学校、千葉県等の関係各位のご尽力、特に地元の方々の絶大なるご協力があってこのシンポジウムを開くことができました。敬意と感謝の気持ちを申し上げ、第8回里山シンポジウム実行委員会及びNPO 法人ちば里山センターの代表としてのご挨拶といたします。どうもありがとうございました。

ご挨拶

千葉県農林水産部森林課長 向後宏保

皆様、こんにちは。千葉県森林課の向後と申します。

里山シンポジウムの開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。



はじめに、このたびの東日本大震災により、被災された方々に、心からお見舞いを申し上げます。

県では、一刻も早い復旧・復興に向け、取り組んでまいりますので、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

今年の里山シンポジウムでございますが、大震災の影響により開催が危ぶまれていましたが、いすみ市において第8回目を迎えることができました。地元市のご配慮や関係者の皆様方のご尽力の賜物と、この場をお借りまして厚くお礼申し上げます。

今回のシンポジウムのテーマは、「里山里海と食～夷隅の根っこから元気に～」ですが、これはいすみの里山里海の恵みを食という角度で考え、地域を再認識し、皆様方といすみ市の力を見直そうというものです。

会場の皆様方には基調講演をお聞きただき、午後からの5つの車座意見交換会にも、ぜひご参加をいただき、いすみ市での里山里海における様々な課題について話しあい、認識を深めながら、かけがえのない美しい里山里海を保全し、次代に引き継いでいく事について、ご意見を交わしていければと考えています。

さらに本日は、野外にテント村が設営をされており、夷隅で生産される農林水産物やご当地料理などを展示即売しております。

県では、千葉県を元気にする「がんばろう！千葉」を、知事を筆頭にキャンペーン中です。県民の皆様方にも「千葉産品応援隊」を募集しているところでございます。千葉県産の農林水産物の購入について、野外テント村に立ち寄り、皆様方にご購入いただければ幸いです。

また今年には国際森林年でございます、日本の国土は2/3が森林でございます、日本は世界でも有数の森林国でもあります。千葉県は県土の1/3しか森林がございませんが、ここいすみ市には豊かな森林資源と生物多様性に富んだかけがえのない里山が多く残されています。

国際森林年のテーマは「森を歩く」ということです。昨日のエクスカージョンでは、多くの参加者に里山里海を歩いていただきました。会場の皆様方にも、森林を訪れ体感頂けましたら幸いです。

最後にこのシンポジウムが「里山の未来に託す私たち」を皆様方お一人おひとりのテーマとして考えていただき、様々な取組みが、震災の復旧復興にもつながっていくことを、ご祈念をして、ご挨拶を終えさせていただきます。

本日はよろしくお願いいたします。

ご挨拶

いすみ市市長代理 副市長 渡辺雅文

皆様 こんにちは

ご紹介をいただきましたいすみ市の副市長の、渡辺でございます。

第8回里山シンポジウムの開催にあたりまして、一言、ご挨拶を申し上げます。



本日、「夷隅郡市自然を守る会」をはじめ、県内の各団体にご参加をいただき里山シンポジウムが盛大に開催されたことをお喜び申し上げます。また実行委員会の皆様方には開催にあたり感謝申し上げます。

只今、実行委員会代表の方からご挨拶がありましたが、里山里海は農林水産業の生産の場として、また、良好な景観の形成、生物多様性の確保、文化の継承、リクリエーションの場の提供など、多様な機能を有しており、その恵みは多くに方々が享受されております。

いすみ市においても、里山里海の恩恵を受け、農林水産業が成り立っております。しかしながら就業者の高齢化により、適正な管理がなされておらず、その機能が失われつつあります。

そうした中、本日「里山音海と食 - 夷隅の根っこから元気に」をテーマとして議論されることは、うれしく、心強く思います。このテーマは皆様の里山里海を大切にする熱い思いが込められていると思います。

大切な財産である里山里海を、市民や関係団体など多くの方々が、力を合わせて保全し活用しながら、人と里海里山との新たな関係を築いていく事が大切ではないかと思えます。

最後になりますが、この機会を通じまして、一層、議論が深まり、皆様方にとってあるいは私どもにとって、大きな成果のあることを心から期待しております。

これにて、ご挨拶に代えさせていただきます。

本日はありがとうございました。まことにご苦労様でございます。

基調講演

仲野隆三氏 プロフィール

ＪＡ富里市常務理事 1949 年生まれ。44 年に富里村農協に入組以来、営農・経済部門を担当し、平成 15 年から常務理事。「ＪＡと食品産業を繋ぐコーディネーター」として、ＪＡ販売事業に従来の枠を超えた新しいビジネスモデルを創出し、生産者の意識改革と地域の活性化をはかってきた。

「農業は販売先を確保しないと担い手は育たない。産直も含めてどのように販売提案するか。毎日異業種との交流に触発されることがエネルギーになる」を胸に、一次産業復興のため活動中。



地球温暖化に関して、以下が持論

20 世紀は化石燃料と森林資源（パルプ等）に依存した高エネルギー消費社会構造であった。大量消費社会は産業廃棄物の廃棄により環境悪化やエネルギーロスをもたらし、人間の生き方まで変えてしまった。

21 世紀は資源の再利用と循環型社会システムの構築が強く求められる。新たな産業革命は日本から発信せよ！

基調講演

「やればできる 2 億から 75 億への成長の軌跡」

富里市農業協同組合 常務理事 仲野隆三

はじめは地域と農業者を知ることから始まりました。生まれ故郷から富里村に招かれた私は、組



合長から 3 つの指令を出されました。一つに、組合員(農業者)への経営及び技術指導をすること、すなわち「技術の平準化」です。二つに、新たな作物の定着「農業者は儲かる作物をもってこい」ということです。三つに、組織育成を進めること。「農業後継者、女性組織、生産部組織」です。

当時地域の背景として、富里村は明治時代の開拓と戦後の農地解放によって関東近辺の次に開拓が始まり、三男が入植していました。平坦な畑作(農地)は 5000ha、川や山はなく夏は早魃、冬は風蝕により落花生と麦、甘藷、里芋、そして僅かな西瓜と裏作の秋冬白菜が作られ、1 戸当たりの経営規模は 2.5~5.0ha、水田は狭小な谷津田 300ha により飯米がほとんど、そのため畑に陸稲を作り飯米としていました。

まずは、全体をつかみ、目的達成のための振興計画作りに取り組みました。はじめに、農家組合「集落」などから学校区などの単位での地域づく

りです。次に、古くからの農業者や古村と開墾の農業者との「営農や生活」における意識の違いを知って互いに歩み寄ること。第 3 に、顔役や農村部の「しきたりを踏む」やり方を大切にして必ず挨拶するよう心がけました。第 4 に、青年に対しては、若者の考えを知り「新たな情報」を伝える場として営農塾を開校しました。最後に、女性の交流として「生活文化活動」を支援し、企画提案を出し合う取り組みです。

次に、昭和 44 年 7 月から具体的な行動に移りました。それまで理事、管理職などの職員は営農指導員に対して金融共済、経済渉外などの推進業務を課せず、営農指導員の役目はもっぱら営農指導でした。当時、営農指導員は専門性を求めることもあり、農業改良普及員に準ずる能力を求められましたが、富里は産地や販路開発、さらにマーケティング能力も独自に培うことになったのです。これ以降、営農指導員の役目に販路開発やマーケティングも加えられました。

しかし当時は、組合員は農協の販売には加わらず、独自の組織や個人販売が主で、農業者同志の価格競争や自分達さえよければという考えが多くありました。隣より高く売る「優越感」ですね。自分達さえよければという考え方で、農家同士の潰しあいでした。産地すなわち富里は京浜市場の「草刈り場」で刈れば刈るほど取れるといわれました。産地商人に「買い叩かれ」て泣く泣く半値で売る農家が多かったようです。私は、このまま行けば、農業者(組合員)は農業をやめて他産業に流出してしまう!という危惧を強く抱きました。

そこで、これらを解決するための具体的行動として、第1に、農産物の品質を高めるために栽培技術の平準化をしようと、篤農家の技術をレベルの低い農業者に伝えたり、技術を論理的に紐解き、農業青年に基礎技術として教えることに努めました。さらに難解な課題は、農業試験場や先進産地研究で取り込もうと。また、農業者やグループを地域(富里)で、一本化すなわち共販産地化して、年寄と青年に対して信頼関係を構築する(互いに顔と名前を覚える)ことを大切にしました。

さらに、次の段階では、全体を動かす行動として、農業後継者(18~35歳)480人による農協青年部の組織を設立し、先進地の視察や講習会の開催などによって仲間作りをすすめ、スポーツ文化活動も盛んにしました。また、生産部設置規程と集出荷機械施設の整備をして共販組織を育成しました。13の生産組織が育成され、共販化ができたのです。すなわち大型産地基盤整備(5大集荷場構想)です。

また、品質管理の意識統一と徹底をおこなうためブランディング化し、支部組織や卸を説得し協力を要請しました。まず近隣農協との価格比較で常に1プライスリーダーであることをめざし、我が農協1販売戦略を実施しました。高値で負けてもグロスで勝つ、経営収支で優る販売単価です。高齢者も参加できる契約取引を導入し収入の安定をはかりました。カルビーポテトやツムラなどとも契約取引をすすめました。機械は農協が導入し、共同利用することでイニシャルコストを抑制したのです。高齢者など運搬労力がない農家(庭先)に運送会社が引取に出向くなど弱者救済として、集荷施設までの搬入を農協が担当しました。地域が連携してデリバリーコストを下げ、協同のメリットを生かしました。農業指導連絡協議会に農協、役場産業課、普及センター、農業委員会、農業共済組合が加入し、毎月会議を開き、地域農業振興計画を皆で考えました。土壌分析・農薬安全使用、簿記などの指導は徹底しておこないました。

変化に対応するステップとして、次のことに取

り組みました。10kg500円のものが入り100円と、バブル崩壊後、デフレ経済に突入し、農家は野菜の安売りに悲鳴をあげました。このままでは、農業後継者は残らない、との危機感がありました。卸売市場を経由しないで直接販売することで再生産価格を維持したのです。販売の大転換がおり、「再生産価格」を基本に、卸売市場から直接販売するようになりました。すなわち小売店から商社まで40社との365日の交渉をおこない、販売債権積立制度1億円を造成してリスク管理をおこないました。One to One (Buyer 対 Buyer) の取引で一瞬で決定してしまいます。量販、小売、商社、全農がグローバル情報と国内産地情報を常に把握するよう努めました。約束と信頼関係の継続で納品書や契約書のない世界です。「単身世帯、個食の浸透」という食の外部依存が年々増加傾向にあり、冷凍、加工野菜として消費の60%が中食・外食産業で占められ、その多くは中国産です。国産野菜は、人件費が1/6以下の中国と比べ競争にならない状況です。また、天候異変で野菜生育と収量は変動し、契約農家はそのリスクに泣いています。スーパーも生鮮野菜売り場は減少し、惣菜コーナーは伸びています。カット野菜、機能惣菜など加工・業務用野菜の需要は拡大しています。そこで、コスト、食品衛生法、リスク分散したカット野菜や惣菜品を系列的に製造したのです。さらに、加工業務用産地の育成対策として、遊休農地を利用したり大規模化し、採算性を重視しました。しかし、加工業務用野菜は20~30%安く、企業ノウハウは秘密なことから農業経営者は迷うことも多くありました。店舗間競争による需要急変への対応として、農協がリスクを分散化しました。

次に、企業の農業参入と農地法の改正です。H20年、イトーヨーカ堂と組合員(T氏)が「セブンファーム富里」を設立しました。イトーヨーカ堂は富里農協営農部に農業参入を相談し、3ヶ月間で理事会で承認されました。すなわち組合員支援として農協が出資することになったのです。ヨ

カ堂は露地野菜に限定して農業参入を決め、富里地域の資源をすべて活用する、ということにな

次に取引の視点についてお話ししましょう。まず、販売戦略の99%は情報発信力に左右されず、また、産地情報の常時発信で、取引先から注

《 受託販売から直販取引に転換 》

① 受託販売実績 単位：千円・%

受託販売	平成10年	平成17年	平成19年	平成21年	平成22年	10/22 %
米・雑穀	83,233	70,660	63,369	53,796	31,324	37.6
野菜	2,530,198	2,003,876	2,011,136	1,938,471	2,211,702	87.4
果実	1,634,199	1,457,076	1,354,365	1,027,060	1,256,382	76.9
花卉	292,223	293,773	149,296	157,903	152,837	52.3
畜産	357,119	627,692	624,169	52,198	531,605	148.9
小計	4,896,972	4,453,077	4,202,335	3,689,428	4,183,850	85.4 %

② 買取販売実績 単位：千円・%

買取品	H10年	H17年	H19年	H21年	H22年	10/22 %
業務用	128,194	356,298	330,232	-	-	-
原料用	-	1,803,226	2,045,226	2,511,940	2,676,418	148.4
インショップ	-	194,776	220,308	295,434	302,913	155.5
その他	-	80,233	61,113	74,046	62,531	77.9
小計	128,194	2,434,533	2,656,879	2,881,420	3,041,862	125.0 %

文が入る態勢が必要です。季節変わり目（天候変化）で需要が変わります。どの農業者がこれに対応出来るか、農協から発信する必要があります。需要に応えるため、農家に収穫期を早めてもらったり、ダブツキ気味なら売り場を広げてもらうなどの売込みも必要です。さらに、契約取引先にも

① 産直事業実績(産直S2ヶ所) 単位：千円・%

分類	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	18/22 (%)
野菜類	157,151	183,054	208,682	203,272	221,403	140.9
西瓜類	112,479	129,454	122,410	119,619	124,224	110.4
肉類	21,449	23,499	24,111	24,786	27,694	129.1
米類	10,101	13,768	17,737	17,045	16,770	166.0
花卉類	25,687	33,358	35,995	36,459	38,156	148.5
宅配	13,681	16,939	17,223	15,824	20,815	152.1
業務取引	27,405	31,510	29,967	32,894	31,926	116.5
その他	109,829	133,807	142,801	144,822	142,105	129.4
合計	477,782	565,389	598,926	594,721	623,093	130.4%
来客数	35万人	37万人	38万人	41万人	43万人	
店舗面積	34坪/64坪	業務営業開始	業務営業開始	業務営業開始	34坪/64坪	

注引量を増やしてもらったり、それでも駄目なら卸売市場にお願いします。あらかじめ、買う相手を決めておくことが大切なのです！誰が買ってくれるかわからないものに良い値段は付きません。一方で、相手が欲しいものには販売努力はいらなないのです。問題はどこにでもある野菜の販売努力が必要だということです。如何に売り込み、取引先から認知されるか、売込むか、ですが、企業活動に産地は参加協力する企画取引も必要です。

守友裕一宇都宮大学教授による2011,4月経営実務特集より抜粋したものを紹介します。地域再生のための考え方は、地域で豊かに暮らしたい、自分たちの住む地域をよくしたいという気持ちは、多くの人の共通の意識でしょう。しかし、現実的には難しいものです。景気の低迷、若者の就職困難、無定見な政治（無縁社会）のひろがり等、そこから抜け出して新しい住みよい社会を作っていくには、どの視点が必要なのでしょう。

民族研究家である結城登英雄氏は、地元学を提起する中で「よい地域」の条件として次の7点をあげています。第1によい仕事場をつくること、第2によい居住環境を整えること、第3によい文化をつくり、共有すること。第4によい学びの場をつくること、第5によい仲間がいること、第6によい自然と風土を大切にすること、第7によい行政があることだそうです。

次に、内発的発展論についてお話ししましょう。1970年代、国連で議論され、1980年代日本でも農山村地域づくりの経験をふまえて整理されてきた5つのポイントがあります。すなわち、地域の資源、技術、産業、文化を土台として、再評価し活用、住民が自ら学習し、計画する事。学習や参加の場の設定が地域での人材の輩出の、基礎になる、地域産業連関の重視すなわち地域の多様な産業を互いに評価し、相互の連携を図っていく事、環境・生態系の保全、アメニティー（快適性を伴う環境）の向上を当然の枠組みとしている事、地域住民の主体的参加による自治、自律的意思決定を重視です。この過程でそれぞれのひとが持つ潜在能力を発揮し、それが人間発達、豊かさへの道であるという点を認識している事がポイントです。

さて、内発的発展を基礎とした再生のための柱は何でしょうか。小田切徳美明治大学教授の地域ガバナンス論では、地域づくりの「場」「主体」「条件」という側面から、再生のために3つの側面を

提唱しています。参加の場づくりすなわち住民が参加して行う、地元の再発見の活動。として、暮らしのものさしづくり。地域に生きる誇り、価



値観の再構築、農の営みを基礎とする農村の景観、暮らしの知恵や伝統技法、その保全と活用です。

として、内発的なアイデアの形成による「お金と循環づくり、繋がりづくりの運動」です。内発的なアイデアの形成による「お金と循環づくり、繋がりづくりの運動」についてお話ししましょう。これは、単純にお金を重視するのではなく、地域の文化、資源、福祉などに価値を見だし、それを磨き、繋げて、地域活性化の基礎づくりをするものです。今村奈良臣東京大学名誉教授が提唱した「六次産業論」をご紹介しますと、一次産業は、農業や漁業、林業など。二次産業は、製造業など。三次産業は、小売業などのサービス産業など。そして、一次産業×二次産業×三次産業として六次産業がある、というものです。その狙いは、加工品、外食産業などに回り、その多くが都市部に流失している、付加価値部分を少しでも農村へ取り戻し、また新たな需要創造を換気することにより、川下を見つめた農業の複合化、多角化の中から、小さくとも生きがいのある経済を考えていこうとするものです。たとえば、宮城県「鳴子の米プロジェクト」ですが、山間高冷地に適した品種「ゆきむすび」を消費者が米1俵(24000円)で買い、生産者に18000円支払い、その差額を地域の担い

手育成にまわし、それによって農家、旅館、飲食店、加工業者などが連携しているものです。

さらに重要なことは「時間軸」の追加であり、活動の継続を考える必要があるということです。柔軟な継続・継承の仕方と組織化、系統性・展開性に関わらせながら持続性を構築していくという点では、むらの伝統文化の保存、継承と、伝統文化の継承は「伝統的な祭り」を学校教育の中への取り込み継続のために、行事内容を大人だけでなく子供も楽しめるように変化させることでもあります。また、担い手を一子相伝から、女性の参加、さらに交流している都市住民の参加へと拡大・変化させて対応することも必要です。経済面では、集落営農の活動に注目し、近年では二階建て方式と言われているものです。一階部分は地域資源の協同管理・調整組織として多くの住民が参加し、二階部分は多様な担い手による、さまざまな生産活動の実働部隊として位置付けている動きが注目に値します。たとえば、島根県では、集落営農の組織化・法人化を基礎として、この二階建て部分に、地域を支える福祉機能などを付加し「地域貢献型集落営農」をめざしています。時代変化に対応しながら、新たな形で組織化をはかり、その組織が経済活動することにより持続性を担保しているものです。

以上で話を終わります。ご静聴有難うございました。

車座意見交換会

第1グループ 農林水産業の6次産業化をどう具体化するか 会場 和室

第2グループ いすみの食材があふれる食卓 会場 工作室

第3グループ 里山景観と森と海 ・ グリーンツーリズムに必要なこと 会場 研修室1

第4グループ 耕作放棄地と遊休農地の再生と 会場 研修室2

第5グループ 新しい里山の価値の創出 (オーガニック、ウーファー、サーファ-)
・・・自由な天地を開く若者たち 会場 茶室・作法室

車座意見交換会 第1グループ

農林水産業の6次産業化をどう具体化するか

会場 和室 参加者 12名

担当 金親博榮、田中 収

趣旨 6次産業化とは 農業などで、生産から流通までの工程を取り込む事



農業、水産業は、産業分類では第一次産業に分類され、農畜産物、水産物の生産を行うものとされている。

だが、六次産業は、農畜産物、水産物の生産だけでなく、食品加工（第二次産業）、流通、販売（第三次産業）にも農業者が主体的かつ総合的に関わることによって、加工賃や流通マージンなど、今まで第二次・第三次産業の事業者が得ていた付加価値を、生産者が得ることによって農業を活性化させようというもの。

問題点と解決策

- 1 日本の食市場は縮小，特に国産の農林水産物の市場規模減少の中で多様な差別化の取組みがある。
- 2 6次化の取組みは，川下の食品産業が主導する形で農業に浸透。産地サイドでも大きな発展を遂げる農業法人等が増加
- 3 川下主導の取組みは，地域農業や地域経済全体の振興という点で不十分。地域の所得・雇用を広げ，食の市場全体を拡大，豊かにしていく地域を強くしていく必要がある。
- 4 地域全体の活性化につなげる戦略や「担い手」が明確になっていない問題がある。
- 5 大手企業が手を出せないようなローカルなニーズをとらえた商品開発。また商品・サービスに文化・歴史，福祉，環境等，地域に内在する価値や課題を非物質的価値として織込む取組みが有効。
- 6 取組み参加者全員の自発的な協働がビジネスの成功要因となる構造がある。一方，ソフトな資本の強みを生かすためには，販売や設備のための一定のハード投資も必要
- 7 誰がやるか。農協もその一つ。「地域に農業がある」ことのメリットを地域全体で共有し6次産業化を広げていくことは，農村から日本社会全体のあり方を組み替える可能性を持つ。

「理屈は分かった。でも、やる時間はあるのか。成果は上げられるのか」

日中に農作業をして、夜に食品加工をすることはできるかもしれない。

しかし、商品売り手に営業に行けるか？ 配送まで手が回るか？ インターネット通販に挑戦したり、漬物やパンなど加工食品を作っている例は多いが、成功したと言えるものは多くない。

オランダは大きな国ではない。人口が1660万人、国土は4万1000平方キロメートル。農地面積は日本の4分の1。オランダ農業が強い秘密は、加工貿易にある。

近隣から飼料用の小麦を輸入して家畜を育て、畜産物を製造し、それを輸出する。トン当たり小麦は342ドル、チーズは\$5652、豚肉は\$2780、トマトは\$1186。

仲間の活動

活動例1：レストラン「四季菜」

NPO法人「そとぼうわーど」で6年前から里地・里山の再生活動から、耕作、販売へと持続可能な農的ライフスタイルを構築するための一部として開店したのが「四季菜」。主にいすみの里山・里海からの恵みを使用した川下部分の担当、素材・調味材にこだわる商品開発・販売を行う、食材の宝庫、いすみの農産、海産物でサメのジャーキー、古代米のおはぎ等を製造販売、国道128号沿いでレストランも営業中。環境に対しては、放射能対応という事で、ひまわりを植栽する。長らく旅行業に携わり、国内外の色々なところを見てきた。t-sam@soleil.ocn.ne.jp

〒299-4502 いすみ市岬町中原27-5 Tel/Fax - 8348 田中収 080-1101-0217

仲間の活動例2：「わたしの田舎」谷当（やとう）工房・谷当グリーンクラブ

都市に隣接した農村千葉市谷当町の自然と環境を守りながら、地元の農産物を原料とした味噌教室、ウィンナーソーセージ、ハム作り、料理教室、寄席、流しそうめん、フラワーアレンジメント、テーブルマナー、キャンプ場、流しそうめん、など、AEDの安全講習会。

いすみで捕れたイノシシのウィンナーはいかがでしたか。本日試食していただきました。市民農園、椎茸菌の駒打ち、レンゲ栽培、里山センターのホームページのヒット数分析から、ドラム缶風呂、炭焼をキーワードとして検索しているものが上位になっており、里山での魅力的な項目が推し量れます。

参加者の活動と興味

大木の伐採の楽しみでもありますが、商売にもなるよね。八千代市では、里山を守り育てる条例を作っているところですが、里山景観の大切さを市民が理解して、このボランティア活動が進むといいですね。



東京都市大学環境情報学科では、生物多様性の保全に里山の活動を結びつける研究、活動を行なっています。睦沢町で、山菜の栽培、採取などで里山を活かす、田舎での利用方法を考えています。食材として、メニューのヒントが欲しい。

成東では、サンプスギを使った家作り、地域内での資源循環を通して、産業の活性化、地域の活性化を目指す

「さんむフォレスト」。

論 点

しかし大きな規模にしていくことは、必ずしもよい事ではない、建築で言えば、大規模化ということは、効率を最優先するハウスメーカーになる事につながる。その方向ではなく、小さくても、その地域に根ざす循環型社会によって、「なりわい」の「継続」によって幸せを目指すべきと考えています。

いすみの今のあり様を、持続可能な生き方という視点から見る事は、他の地域でのヒントにもなる筈。販路の拡張についていかにやるべきかを模索しているが、これまでのように急拡大を目指すわけではない。生業が立ち行かなくなった社会の歯車を、今まさに正常化しなくてはならない時である。

生き方というものは、個人の価値観そのものではあるが、欧米では、発展している所、ダメな所があるのは、需要の大小ではなく、コミュニティーの地元資源に対する意識の違いに左右される事が大きい。高くても、地元のものを買う、地域をサポートしようという意識を如何に育てるか。地元にとって一番の悩みは、やはり販路の開拓である。産業化出来なければお金は回らない。

それには、まず地元の資材、環境、景観、人材、技能、文化を含めた広義の地元を見つめる事が大事となる。

原料から製品を導く、逆に製品から原料を考えて産業に結びつけるという双方向ともに正解。成功のポイントは、オリジナリティーにある。小さなエリアで成立する事が生業なりわいであり、何人かは必ず生きていけるという社会が、これからの地域社会のあるべき姿である。

日本では、110万haの米で、アルコールは賄えるという6次産業化があるとしても、バイオ燃料の問題点はコストの問題以外に、食料を燃料にしてしまう倫理的な側面を見るべきである。それぞれに違う開発の歴史的過程や土地の傾斜、土質、水利、エリアとしての束縛などから、棚田でも耕さねばならなかったのが日本の元来の姿であったはず、そこに日本人の生き様があったのではないか。それが燃料になってしまうとは、許されない事。

食料の自給率論をカロリーベースのみにおくのは欺瞞である。それぞれの国の穀物、油、肉などの異なる食品群の比重を考慮して考えるべきであり、日本に当てはめれば40%ではなく60%になるのが本来の姿。

T P Pについていえば、よく牽かれる韓国は、F T A . E P A等で特定国と自由貿易をできているだけで、まだ批准していないという現実は報道されていない。農業の専業率は韓国では60%で、農民の労力を他産業は吸収しない点日本とは大違い。中国も同じ。関税障壁を取り除かれたら国産品は太刀打ちできないから、反対だというけど、実態は為替レートによって、関税などは、吹き飛んでしまうという現実を見なければならぬ。

中国の進出を抑える目的でやっている米国の策には乗ってはいけない。W T Oでの対立構造の根源は、取り決めに違反する米国内の輸出補助金にある。

いすみの食材があふれる食卓

会場：工作室

参加者16名

担当：中村松洋 宮内陽子 佐藤聡子

趣旨

いすみ市は自然環境にめぐまれた伝統文化の絆あれるふるさとです。そして、里海、里山のめぐみから豊かな食卓を作っています。いすみ市の沖は、黒潮と親潮がぶつかる場所からも宝の海と言われてきました。

特に、イセエビは全国屈指の漁獲があります。魚や生きものにとっても住みやすい器械根という（砂場と岩場の入り組んだ）地形があることから、イセエビ、サザエ、タコ、イワシ、アジ、タイ、イナダ、スズキ、ウマヅラハギ、イサキ、フグ、ホウボウなどが生息しています。

また、豊かな森林にかこまれた里山からのめぐみは食卓をさらに豊かにしてきました。温暖な気候から果実の实りにもめぐまれています。伝統食文化をさらに豊かな食文化にすることは人と人がつながり、知恵のかけ算をすることだと思えます。

自己紹介と情報交換

（何処の地域で、現在は、何をやっているか?!（それぞれの方の発言の前後をまとめさせて頂きました）イノシシの話が盛り上がり時間が押してしまいました。

- * 地元いすみで漁業に携わっておられる（担当の宮内陽子さん）から話をはじめて頂きました。
 - ・ 子どもの頃から目の前が海だったので、磯遊びの場でもあり食材を自分で採ってくるのがあたりまえと思っていた。エビや魚、海藻など毎日食卓にあった。畑や田んぼ、漁をする、自給自足をしている家が多かった。いすみは無いものを探す方が大変！
 - あるとき、これってすごい事なんだ（豊かな食卓なんだ）と思えた。他を知らなかったから・・・
 - ・ 大原、勝浦は、サザエ、イセエビは全国一。地ダコの種類も多く、カレー、イワシ、イナダ、カツオなど、多様な種類が獲れる。そして、首都圏に近いし、全国でも若者も多い地域。

（県庁の水産関係）
 - ・ ホタルにも里海里山の食に興味があります。知的障害者のお弁当を作っています。

（富里市ホタル保存会）
 - ・ いすみの野菜、魚、イセエビに誘われて。

（鴨川市）
 - ・ 他の市、町の食材を知りたいと思いました

（木更津市）
 - ・ 有害駆除でイノシシを獲っています。どんどん増えています。
- * 食材として良い知恵が欲しいです。マザー牧場の裏で罠を仕掛けて40頭、自費で捕獲しました。

いすみ市では、年間700万～800万円の予算を取っているが茂原市はまったくない。千葉県は気候が温暖でイノシシが冬を越せる。1年中餌に困らないからどんどん増える。ウリボウも40頭ほど捕獲したが増え過ぎている。里山を活かすにはイノシシとは仲良くなれないし、現在は人と動物の住み分けが出来ない状態で電気柵の方法を取っているがそれがいいかどうか？
猟銃免許、罠の免許を取得しましょう！
（提案）イノシシの肉をB級グルメとして認めてもらうことも必要。
- * 会場ロビーでイノシシ、アライグマ（メスでした）毛皮を見せてもらえました。

青空市で（イノシシのソーセージの試食もありました。）食べてもらって知ってもらうことが必要。

(長生郡在住者)

- ・ 地元です。マイワシ、セグロイワシは非常にうまいですね。6年になります。
- ・ 千葉県がこんなに食材があることを知った。東海地方で育ち、醤油の味が違う。(浦安市在住者)
- ・ 農を通して地域コミュニティとして、アジア留学生、障害者と栽培して、創作料理をやっています。(東金市在住者)
- ・ 自給自足にあこがれて、現在は少し野菜を作っている。(富里市在住者)
- ・ いすみはいいところですね。イノシシ(うまいもの)の話が聞きたい(新潟生まれ)
- ・ いすみ鉄道のお弁当を作っています。なるべく自然の物を使っている。ムーミンキャラクターの色にこだわっている。青色の出し方の知恵をください。(岬の安藤さん)
- ・ 仙台から移住し、やった事がない農業を始めたが・・・。4年目です。いすみの人たちの暖かい心に励まされ、トマト、イチジク(果樹)を作っています。現在はリピーターが多く、東京・六本木の店に出荷しています。
- ・ 里山を守る政策だけではだめだなと思います。食に興味をもつようになった。エクスカッションにも参加しました。食の切り口も研究して見たい(東京都市大学・横浜市)
- ・ いすみ市で3年前、いすみの食材を使って、中村氏の協力で「生物多様性食文化料理教室」をさせて頂きイセエビ、イワシ、タコ飯、さつま揚げなど「浜のかあちゃん」の料理を学ばしてもらいました。(千葉市在住者)
- ・ いすみの機械根の岩礁で捕れる伊勢エビの漁獲が乱獲で少なくなっている。アワビが少なくなってしまったので禁漁や人工的に稚貝の放流などをして資源の回復を待っています。
現在、次世代につなぐにはどうしたら？を心配しています。後継者も減っている中「海を守ること」をやっていきたい。海と山は川で繋がっている。他の自然もしっかり守らないと海は守れない「夷隅郡市自然を守る会」に入って勉強をしています。自然環境が変わりつつあり、丘の自然がきちんとしていないと海にも悪影響がでる。他の漁師さん達にも今日、参加して欲しかった。海を守るためには大勢のチカラが必要。そのためにはスナメリが一つの切り口になり、地域をつなげることかな～？(いすみ市・漁師他)
- ・ 外のテントで売っていたハチミツが美味しかった。
- ・ 御宿町の薔薇園では「薔薇ハチミツ」が作られています。



万木城から見たいすみの里

いすみの人は、他の世界を知らない!
・何でもあるから、あるのがあたりまえと思っている!
・素晴らしいところに暮らしている意識がない!

とりかえっこしようよ!
うらやましい〜!
・料理に女性の知恵が必要!



第2グループ：車座意見交換会



アライグマとイノシシ

意見交換とまとめ

- 1 いすみ市は海からも、里からも、山からもなんでも採れるから、特別には何にもない！と言ってしまうが、実は良い所。台風の直撃もないし、温暖で、住みやすい所。外から来た人たちに、良いところだと気付かしてもらおう。実は宝物がいっぱいあるところ。宝物を活かす工夫をしてもっと豊かになろう。
- 2 自己紹介をしながら、みなさんから、食の加工のいろいろな提案がされました。
- 3 イノシシを穫る助成金もいすみ市は確保されていて去年は192頭穫っている。イノシシ肉の料理の工夫をして、イノシシ料理が食べられるレストランを作ったらどうか？バーベキューを食べられるところもあるといい。アンテナショップを作ったらなど数々の提案がありました。
- 4 料理の工夫には女性の力が必要です。料理講習会とか・・・。
早速、イベントで（11月3日）試食料理を作ります。申し出がありました。
（サメの肉を工夫した経験があります）
- 5 地元の人たちに食べてもらって知ってもらおう。特に、地元の子供達に学校給食で食べてもらおう。
（いすみの食材の味を知ってもらおうのが大事）
- 6 地元の宝物を知る事から、他の地域のことも知る事も必要である。

結論と感想

他の地域からの参加者が多く、いすみの人の温かさを知り、食材の豊かさを知り、うらやましいながらも、食材の加工の工夫に様々な提案がされました。イノシシを穫って加工の提案にまで及び、話は盛り上がりました。東日本大震災にも手を差し伸べて、宮城方面へ支援に何回も訪れている温かい心根のいすみの人たちです。風土の豊かさが、人々の心根も伸びやかで豊なのでしょうか。

イノシシの被害の切り口を変えて、活用する工夫の研究は求められます。

イセエビやサザエの漁獲の復活も豊かさの恩恵を見つめ直して、自然を大切に持続して守ってもらいたいと思います。東京湾や相模湾周辺ではその姿を見ることがほとんどなくなったスナメリがたくさん見られるいすみの里海は魅力的です。

参加されたみなさんご協力ありがとうございました。

里山景観と森と海：グリーンツーリズムに必要なこと

会場：研修室1

参加者22名

(司会)伊藤幹雄 (記録)栗原裕治

趣旨

グリーンツーリズムという言葉には一定の定義がありそうだが、なんとなくの理解が一般的だろう。考えてみれば、地域にはいろいろな資源があり、それぞれに特徴があるわけで、地球上には地域の数ほどのグリーンツーリズムがあり、もちろん夷隅地域にも夷隅のグリーンツーリズムのスタイルがあるはずである。

夷隅という名前からは悠久の歴史が感じられる。山の幸や海の幸に恵まれ、外部との熾烈な摩擦もなく平和に暮らしていた縄文人等の古代の日本のイメージが浮かんでくる。温暖な気候、海、川、森の自然の恵み、そしてそれらを活用してきた生活や食文化。考えてみると、夷隅地域には、現代人の求めている



いるスローライフの理想郷としての要素がぎっしり詰まっている。

今回の車座意見交換会では、(社)千葉県観光物産協会の福田百合さんから千葉のグリーンツーリズムの最近の動向について解説してもらうことで、参加者全員でグリーンツーリズムのおよその概念を共有するとともに、地元の「NPO大東埼燈台クラブ」と「NPOいすみライフスタイル研究所」の活動報告をもとに、これからの市民が主体的に行うグリーンツーリズムの活動について意見を交換した。

経過

(1) (社)千葉県観光物産協会・福田百合さんの解説

グリーンツーリズムは、観光客が見て通り過ぎるだけの観光ではなく、地域の日常を体験してもらうこと、味わってもらうことが重要である。地元の人にとって日常的なことでも、来訪する人には非日常なことは多いが、地元の人はそのような特別な価値になかなか気がつかない。

グリーンツーリズムは、地元の人が地域の価値を発見し、その価値をシェーブアップして提供することで対価を得る地域振興策であり、貴重な地域資源を守り育み、後世に伝えていく役割を持っていて、千葉県でも大都市圏に隣接した強みを生かしたグリーンツーリズムの振興に力を注いでいる。

(2) NPO大東埼燈台クラブ・橋本文江さんの報告

大東埼燈台のある高台に上ると、夷隅川の河口干潟が一望できるなど夷隅地域の大パノラマが広がる。この場所は、地域住民の心に焼きついた景観であったが、戦後に燈台守がいない無人の燈台になると、草木が生い茂り、人が容易に立ち入れない場所になってしまった。

そこで、地元住民がボランティアで木を切り、下草を刈って現在のように整備し、地域の憩いの場として復活させた。外房地域の観光資源としての価値も高く、NPO太東埼燈台クラブは、継続的に整備を行うとともに、やってくる人のための休憩所を開設し、特産品の販売や地域情報の提供、周辺の自然、歴史、文化のガイドも行っている。

(3) NPOいすみライフスタイル研究所の報告・大花慶子さんの報告

いすみ市の高齢化が進んでいる一方で、いすみ市に移住・定住したい人もおり、新しい住民が増えている。この移住・定住を促進させようと、さまざまな体験ツアーを企画したり、移住希望者への相談などを実施している。

夷隅の魅力に惹かれた先輩移住者が一緒になっての企画や相談は人気があり、東京や神奈川から参加する人も増えている。



意見交換

2つの事例は、参考になった。これらのことを含めてグリーンツーリズムというならば、夷隅地域には「波の伊八」の作品や大原の「はだか祭り」など多くの資源がある。

いろいろな取り組みがあるようだが、十分に見えていないし、印象が薄い。横のネットワークをつなげることで、PRに工夫ができるように思う。

地域資源やひとつひとつの取り組みを商品にたとえるならば、商品価値の魅力度を上げる工夫が重要。商品をメニュー化することで見えやすくなるのではないかな。

情報発信は難しい。最近はウェブも重要になっているが、それだけでは駄目で、魅力的な音楽、映像、文章などのコンテンツが必要になる。新聞や雑誌に取り上げてもらう工夫も必要だが、誰が中心になって行うのか。少なくとも行政ではないと思う。

車座意見交換会 第4グループ

耕作放棄地と遊休農地の再生と活用

耕作人不在農地と改称？

会場：研修室

参加者 22名

担当：ゲストコメンテータ

廻谷義治（特定非営利活動法人千葉県市民農園協会 会長）

コメンテータ

中村俊彦（県立中央博物館 副館長・千葉県生物多様性センター副技監）

シンポジウム進行役

木下敬三(さんむ・アクションミュージアム) 戸張七重(一宮ネチャークラブ)

目羅暁生(特定非営利活動法人そとぼうわーど) 室住 環(さんむ里の子自然塾-あいよ農場)

趣旨

食糧は全て土地から生れます。土地を耕し種を播き、地の養分・日光・水・時間を与え育ちます。出来上がった植物性食糧を与えて、動物性の食糧を得ます。土地が無ければ動物も生きていけません。祖先から永い間、耕してきた食糧生産地が今、荒れてきています。

福島原発の放射能が、千葉県にも到達しています。これを考えれば、耕作放棄してしまう農地が増えないか？耕作しても作物を食、出来ない農地に成ってしまわないか？！危惧される今日です。
今回は、この部分は棚上げしての車座ミーティングです。

プロフィール

参加者は柏・東葛から南房総・鴨川まで北から南まで広範囲の方が参加されました。中でも富里からホタルテーマの団体で来られています。

参加者の想い

全国の田畑を見たが、千葉県は耕作放棄地が多い。地元を見直していこう。

鴨川は有害獣の発祥地？

遊休地を畑の学校として利用している、市民農園は可能か？

谷津田の草を刈り取りホタルの里に

谷津田を再生中、ひまわりプロジェクトを展開中

休耕田を復元、ネチャーゲームで子どもの環境教育を

実家が農家、趣味の範囲でビオトープをつくっている

田んぼ・畑を耕作しているが奥地は放棄地

葦原を開墾して耕作再開した

ベビ・チビ農業、遊休地と遊休人をくっ付ける

自然エネルギーの開発中



耕作放棄農地の現況などを、中村さんよりパワーポイントで説明

市民農園の説明を廻谷さんからパワーポイントで説明

参加者の事後の想い

中村・廻谷さんのお話の後、ディスカッションとは、いかなかったが、市民農園に対する想いや、農地に向ける想いをぶつけてもらった。

農が軽くみられる、農教育の不足

自分が耕さなくても、耕す人を募集する

耕す事で農に対する理解者を増やす。無関心者をどう引き込むか？が課題に

行政の壁、農地法の壁、法の整備、クラインガルテンは民間では不可能？

農家が開設して非農家が市民農園の運営は可能

ホタルの為に放棄田の草刈りはOK、耕作は不可、減反率の低下はダメ？

農家に農地は共有地である意識が芽生える？

農家は所有権の主張が大きい？農地を他人に貸す罪悪感？利用してもらおう感覚を

農地は生物の宝庫、子どもへの教育効果は絶大

ホタルから始まる農への関心

小学校区、自治会単位で耕作放棄地の環境教育の農作業を

小学校で田・畑の耕作をカリキュラムに入れている小学校も地方では多い

地主への借地料は、少ないが現金収入になる

放棄農地を利用して食としての活用

地主・土地改良区とのコミュニケーションで地域の慣わし等を教わる

農地は環境問題の根幹、空気・水・土壌のそのもの

第6次産業化を

結論・感想

農地は農作物を得るだけでなく、無限の可能性の在る事も解かってきた。そもそも、そうであった農地を作物・作業効率最優先で化学肥料は勿論、化学農薬で、生物・・・環境・・・等を切り捨てたのが、どうして慣行農法で定着したのか？日本の2000年来の農法は何所に？

市民農園が耕作放棄農地の有力な解決方法の一つが確認された。農地法の壁は、入園利用方式の市民農園でクリアーできる事も解かった。農家の農地に対する想いも、決して所有権一辺倒の主張だけでなく、利用して欲しいと思っている事も、カイマ見えてきた。ホタルの鑑賞は、一般市民の農地に対する関心をとる有効な方法も確認された。

そしたら、非農家が耕作放棄農地にアメーバの如く侵入して行く方法は（団塊世代の遊休人を遊休農地に・食をテーマに）随分在るように思えてきました。

提案

好きで放棄している訳でない。耕作放棄農地と言われるのは心外だ・・・

と言われる農家が居られる。放棄しているのでないので、『耕作人不在農地』と改称してはいかがでしょうか？

新しい里山の価値の創出

(オーガニック、ウーファー、サーファー) 自由な天地を開く若者たち

会場 茶室

参加者 23名

担当 鈴木優子 手塚幸夫 並木秀幸 松永美知子

趣旨

今、里山里海を訪れる新しい価値観を持つ若者たちや、夷隅に住み着いたかつての若者の生き方を話題に、「新しいライフスタイルの創出」、「自然の中で生きる」、「循環型地域社会作り」、「自給自足」、「有機・無農薬」など新しい里山里海の価値の創出を探る。

話題提供者3名の話

1 サーフィンとともに歩んできた中村松洋さんの40年

夷隅で生まれ育った中村さんは、18才でサーフィンに出会った。初めて波に乗った時、体に電気が走るような衝撃を受けたという。以来40年間、サーフィンとのかかわりの中で生きてきた。

サーフィンによって開かれた、外の世界とのつながり



その日の風向きに合わせて、仲間とともに車で移動して色々な地域でサーフィンを楽しんだ。いい波を求めて、仲間とともに日本中を旅したこともある。サーフィンがきっかけとなり、他の地域に足を運ぶことが多くなった。中村さんは現在、いすみ市で釣り船の船長をしている。時化で海に出られない日は休みとなり、漁師仲間の多くはパチンコや飲食などの手近な娯楽で過ごす。中村さんは、サーフィンのおかげで、外へ外へと出て自分の世界を広げることができ、外の人たちとたくさん交流ができたという。

サーフィンを続ける苦勞

中村さんが若い頃は、サーフィンが社会的に認知される前のことなので、苦勞も多かった。昔はヒッピーとサーファーが同様にみられ、良くない人のイメージだった。また、女性目当てにサーフボードを車に積んで街をうろつく輩がいて、真面目なサーファー達も社会の人たちから白い目で見られる時期があった。しかしこの20年で大きく変わってきたと思う。

2 いすみ市岬町に移住した新しい世代のサーファー、小幡のりさんが語るサーフィンの魅力

八千代市に生まれ育った小幡さんだが、サーフィンに出会い、外房や湘南などに通うようになる。やがていい波を求めていすみ市岬町へと移り住んだ。

小幡さんがサーフィンや移住生活を通して得た学び

サーフィンで初めて波に乗った瞬間の感覚、波との一体感が忘れられず、のめり込んでいった。サーフィンは海があるからこそ楽しめるスポーツである。純粋にサーフィンを楽しむうちに、海を守りたいという気持ちが自然と生まれ、ビーチクリーンなどの活動にも積極的に関わることになった。サーフィンを始めたばかりの頃は、海にいる時間が幸せだった。やがて海から上がった後でも幸せを感じるようになり、今では海に行かなくても幸せな気持ちでいられるようになった。

小幡さんは現在、コミュニティの場となるカフェをオープンさせるため、自ら店の建築に携わっている。また、周囲の人たちとのつながりを大切にしながら半自給的な生活を営んでいる。小幡さんは「シンプルな生活」の中に大切なものがあると熱く語ってくれた。

小幡さんの経験と里山での活動の共通点

小幡さんの話について、会場からは共感する意見・質問や、里山での体験談が出された。「サーフィンを通して生まれたという感謝が、里山においても生まれるような活動は何かないだろうか。」という質問に、小幡さんは、海でも森でも、夢中になって遊んでいると『おかげ』に気が付く。森でドングリを材料にクラフトをすれば、ドングリの木とそれを育む森のおかげと気付く。まずは、夢中になって遊ぶことが大切ではないかと答えた。

3 ウーファーの受け入れをしている中島デコさんの体験

WWOOF という制度に関して

WWOOF (ウーフ) とは World Wide Opportunities on Organic Farms の頭文字であり、イギリスで生まれた後、オーストラリアなどで発展した制度である。WWOOF 登録を行ったウーファーとホストによって成り立つ。ホストは有機農場やそれに関係する施設が主であり、食事と宿泊、そして生活・文化を体験する機会を与える。ウーファーは、ホストの施設に滞在し、労働力を提供する。WWOOF は 20 ヶ国以上に事務局があり、ホスト登録すると世界中からウーファーのエントリーが来る。

ウーファーを受け入れた体験談

いすみ市でオーガニックファームとカフェを営む中島さん、ご主人から WWOOF のホスト登録を持ちかけられた。最初は登録に反対したが、実際に受け入れてみると、素直で前向きな人ばかりでファーム運営の大きな助けになった。ウーファーを受け入れるということは自分の生活の場を他人とシェアすることでもある。門を開いて他者を受入れることで、自分の助けとなり、また相手にとっては学びの場が生まれるという良い循環が築けた。



意見交換とまとめ

テーマに惹かれて参加された方は部屋からあふれるほど多かった。「こういう生活があるんだ」とびっくりする人も。もっと若い時にウーファーを知っていたら...との声もあった。

話題提供者と、テーマに惹かれて各地から参加された方たちとの交流の場となった。

「なぜ夷隅に住み着いたか」にはじまり、この地域の自然と人の魅力、本当にやりたいことを思いっきり楽しみながら暮らす人、一度外に出て戻ってきた人などが相互にもたらした文化の交流が夷隅を開かれた地にして行ったとの話に共感。

参加者の中のマウンテンバイク・ライダーからは、サーファーの視点と重ね合わせた意見が出た。里山でトコトン遊ぶと山のおかげだという気持ちが湧いてくる。ただ、海のほうが進んでいるようだ。山はまだそこまでは行っていない。海や川ではつり人のマナーがよくない。

課題としては、思いっきり楽しませてくれる自然へ、どういう形でフィードバックするのか、できるのか。外からの新しい風との交流、新しい生き方も受け入れることの重要性。さらに、地域の魅力を失わない努力があげられた。

結論と感想

守りに入るのではなくて、自分をオープンにする、他人とシェアする、他人を許すという、自分だけでなく相手も高めていくことが、地域や里山里海の新しい価値の創出につながるのではないだろうか。

好きなものを求めて仕事も、暮らしも、生き方も選ぶ、自然体で生きることの気持ち良さが伝わってきた。盛会で時間が足りないくらい、清々しい後味がした。

総合討論

コーディネーター 手塚幸夫

パネル -

- | | | |
|------|------|----------------------------|
| 第1車座 | 金親博榮 | 「農林水産業の6次産業化をどう具体化するか」 |
| 第2車座 | 佐藤聡子 | 「いすみの食材があふれる食卓」 |
| 第3車座 | 伊藤幹雄 | 「里山景観と森と海・グリーンツーリズムに必要なこと」 |
| 第4車座 | 木下敬三 | 「耕作放棄地と遊休農地の再生と」 |
| 第5車座 | 並木秀幸 | 「新しい里山の価値の創出」 |

(オーガニック、ウーファー、サーファー) 自由な天地を開く若者たち



手塚

5つの車座の中では、話し合いがとてもバラエティに富み、参加された方々からの高い評価を頂けたようです。

中には複数の車座を掛け持ちされた方々もおられたようです。ほかの車座の意見交換内容にも関心がある方々も多いでしょう。

どんな話が飛び出し、どんな感想を持ったかを各人から話を1人5分くらいで。

よろしく願いいたします。

第1車座

金親 仲野先生の基調講演を受けての話合いで、14名が参加されました。私とコンビを組まれた田中収さんは、有機農業。安全食品のレストランのお店を経営されている方です。

その話を交えながら参加者からの発言もいろいろとありました。

結論



現状、地元の資源の発掘をしっかりとやりなさいということになりました。それは仲野先生とのやり取りで出てきたことです。地元産業の途絶えそうになっている地域資源の認証技術が

どのくらい、どうなっているのかの現状認識がとても大事という認識。

その結果としてオリジナリティのある商品とサービスを開発すること。それは独創性を優先的に考えることにつながるものをも深く考えること。

レストランだけでなく、山があり景観があり、地球温暖化がありそれらを重要な資源として取り

組む。

感想

今回は時間がなくて尻切れトンボに終わってしまいました。最後のクロージングが出来ていません。

ここで商品を開発して何とかやっけていこうという方々の真摯な取り組みと、もうひとつ TPP への考え方にかかわって話し合いの時間が足りなくなりました。

第2車座

佐藤 夷隅に豊かな食材が豊富にあります。海でとれたエビや魚を豊かに食べていても、毎日なので豊かな食材という認識がいすみにあるということ、気が付かなかったという話から入りました。



いすみ市に仙台市等から引っ越された方々がどんな生活をしているのかという話を伺いました。

富里の方から、放棄された谷津田を再開している話し

を伺いました。また、イノシシを捕獲されている方の話もあって時間をとられたという最終的な話も。

自分たちの食材がこれだけ豊かだったという事を一番意識していないのが、夷隅の人々ではないかという意見もありました。自然が周りにたくさんあって、毎日畑も米も海もあって、豊かな、伊勢えびなど他では食べられないものを一杯食べてきた中でそれを獲りすぎて枯渇しつつあるという危機も伺いました。

イノシシも罠をかける免許を取って、今日もその肉を試食された方々もいると思いました。

結論

そういう食材にあることを知っていただくために努力をすべきではないかと。ネットワークをつくり食べる機会を作って宣伝をすることが必要ではないかということで話がまとまりました。

感想

東京で育ったものですから、いすみに来て本当に豊かな食材を得て、ここで料理教室をやったこともあってやはり自分が住んでいるところの食材が分からないこと知って、東京に逆にツアーを組んでどんなものを食べているのかを知って欲しいといったのですが、知らないことをお互いに意見交換しあって、それを知った時、そこから良いアイデアも生まれるのではないかなと思ったことが感想です。

第3車座

伊藤 グリーンツーリズムと里山景観と森と海。グリーンツーリズムに必要なことという意見交換を行いました。

それから日常に活動しているタイムスケジュールと太東崎周辺でしているツーリズム、それと美観促進活動の状況。

移住・定住計画をグリーンツーリズムを利用して実施している団体、そういうところの活動報告



を受けて、これらをグリーンツーリズムを介して、どう生かしていけるのかを議論しました。

20名ほどの参加でご意見を出してもらいました、その中で、いくつか

共通した話という事がございます。ここの資源は何かと考えたとき、どうも資源が実はたくさんあ

りそうだと、それが商品としての価値、メニューが資源を磨くというか魅力度を上げること、2つ目は情報発信の在り方。こういうことをやります皆様来てくださいという事をどうやって、どこに伝えて実際の参加者を、それは地道な努力しかないのですが、パブリシティと言うか、地元の新聞、コミュニティ誌、さらに田舎暮らし系の雑誌社への記事掲載をお願いして掲載してもらおうという、パブリシティが重要であろうと考えます。

WEB系は実際にWEBに載った記事に対してアクセスして見ていただいて詳細が分かるという仕組みだろうと。WEBだけで情報発信での成果をあげることはできないと、そういった事例的な話しもありました。

結論

もう一つは資源があって情報が伝わったとしても、それで来てくれた方が多々よかったと言っても、基本はやはり人と人とのつながりだろうと。

もう一度来たいといってくれる人々に再度会いたいというそういったことでファンになってその農園で移住につながり、定住につながり。

感想

そういった人とのつながりを作っていくかそれが重要なことと。そういった3点ほどの意見と会場からの発言。私もまったくそのとおりであると考えました。

この地域の観光とは特に通り過ぎるという観光ではありませんで、その方々には何も見えないと思います。

来て知って味わって体験し滞在し人とつながることで見えてくる魅力。それはこの資源の魅力でありそう。

そうして外部から見える人々の資源としてメニュー化をもっともっとしなければならぬのではないかと考えています。

第4車座

木下 遊休農地を担当した木下です

北は県南各地、八千代市から君津市の里山から、房総の村などいろいろな地域から参加をいただきました。自己紹介を兼ねて皆様から話を聞きますと、何らかの農地に関係している方々です。

だからこのテーマに来られたのだと思いますが、現状の簡単なご報告をいただきました。

そして中村先生からの現状報告。市民農園の協会の会長の方にも話を頂いて、遊休農地の一つの解決策としての市民農園の話をしていただきました。

そのあと皆様といろいろな意見交換をしました。農地は農地そのものが、耕作放棄地がありすぎますよね。農家の方に聞くのですが好きで耕作放棄をしているわけではないという言葉が聞かれます。実際私も2ヶ月4反の田圃をやってみたのですが、これでは放棄したくなり、辞めたくなるのも当たり前だと実感しました。



もう87歳だから田んぼができないからやってくれと言われて、成東でやろうと思ったのですが、一町8反で、その内1町4反が田んぼの放棄地で、4反が埋め立てられ整地された場所です。そこでは畑をやっています。そこを整地して田んぼの市民農園にしようと考えていたのです。

今までは子供を連れて行けるような簡単な谷津田でやっているのですが、そのように気持ちで取り組んだら、農家の方の言う通りでやってみようと思ったが、時間に追われますよね。種まいて何して何してと、この工程を守らないとできないのですね、私も68歳になって一人で4反の田圃

という事はなかなかできないことです。実際は去年までは実際に 87 歳の方がやってくれていたのですよね。その方から放棄寸前の田圃を預かったのですが慣行農法ではやはり止めざるを得ないということは実感しました。



このテーマでのみなさんお意見を聞いた中で、ひとつの市民農園の先生方という方法もあるよということで市民農園家にも来ていただいたのですが、大事なことは耕した土地でできたものを食べるという食という事が、このシンポジウムのテーマですが、耕したものを食べる。それを次世代につなぐというその作業をつないでいかないと、戦後の教育で間違えたことの最大は農を捨てたことだと思います。農ということを学習していない。

各地で農に関する体験農法をやっているのですが、近くの学校でもやっているのですが1反歩の田圃で2列くらいやりと後は機械でバーとやってしまう。そんな教育をしてよいのでしょうか。

結論

休耕田の谷津田で田んぼの復元をしています。その時と平地の慣行田、いままでは遊び半分の気持ちで谷津田で子供たちとやっていた時の考え方とまるで違います。

そこには経済があってそれは早くやって収穫して早くお金に換えようという、農業の方が本業だから仕方がないのでしょうか、そこに除草剤、農薬、肥料というものが出てくるのですよ。それをやるために機具を何千万もかけないとやっていけ

ないのです。が、それをやると、収穫はだんだん伸びていくのでしょがお米の金額が安くなって、それを集約して近所にも 20~30 町歩をやっている人がいるのですけども、トラクタだけで何千万もかけるのです。

古い農業というのは、まあ慣行農業というのは戦前からあるのですが、戦後の慣行農業とは農薬をまいてやるのが慣行農法になってしまっているのです。

それはあくまでも時間の節約のために農薬や肥料をまくという事になってしまっているわけですけど、昔は農業とは腰くらいまで水に浸かって田植えをしている写真があるのですが、その時代の農業というものが家族総出で田植えをやった稲刈りをやった。それを写真にした農村風景があった。今は全くありません。

いまの農法をやっていく事が、個人的な意見ですがこれを継続することがいいのか悪いのか。

そこに農薬や肥料をまかない「ふゆみずたんぼ」という農法があるのですけれども、実際にふゆみずたんぼに関わっている人は、農薬や肥料をまかなくていい。それで 60k で 25,000 円とか 50,000



円とか、中には 20 万円以上で売っている人がいるとか。

昔はそういう時代があって今はそれをやめている。新しい農地になる。遊休農地が全部利用されるという事ではないのですけれども、そこに対して私どもは遊休農地と耕作放棄地を結び付けようと

考えています。

いま 64 歳で定年になって来る人を受け入れ出来る場所として必要になってくるというそういうことです。

感想

農という事の教育をやっていかないと次世代につなぐということがとても難しい。そこに市民農園や耕作放棄地に出張っていきながら、食べて次の世代につないでいこうという事があって自分の感想を含めてそのように感じました

第5車座

並木(発表代行) 主に3つのパートに分かれて行いました。サーファーの方、そしてウーハを受け入れている方、3名の方から話を伺いそのあと、質疑応答をするという形をとりました。

まず、40年の歴史ある中村さん。いすみで漁師をしている方で、40年サーフィンを続けてこられた方でもあります。この方のサーフィンとの半生を語っていただきました。

印象的な話として中村さんは漁師をしているのですが、いすみの小さい世界では凝り固まってしまうのですが、サーフィンを介しての外部の方々との長い付き合いや、本人自体が外に飛び出す機会を得ている。サーフィンから得た恩恵だと。

続いて尾畑のりさんのお話をいただきました。この方もサーフィンに魅力にはまって八千代からの移住をされた方です。サーフィンの魅力は、夢中になって海で遊ばせてもらっていると、ありがとうございましたと感ずることがある。里山で活動をしている人々との共通点として、自然の中で、お陰様でという気持ちが生れるという点がある。そのありがたいという気持ちに添って海でのごみひろいという環境保全への協力をしている。

それは里山に関しても同じではなかろうかという意見がありました。里山の自然の中で夢中になって遊ぶそういう中で感謝の気持ちが生れるので

はなかろうかという結論がありました。



尾畑さんは自分でお店を造っておられて、そのような自給自足の様な、シンプルな生活が大事だということが見えてきたような気がするという。

ウーハに関して、ここではオー

ガニックファームをされていて、ウーハの制度を学び、実際に受け入れている。ウーハとは無賃旅行。ホストの家に入って労働をする代わりに海外の生活を学び、ホストから生活を支えてもらう。滞在期間保証してもらう制度です。若者が利用する制度のようですが年齢制限のない制度の様ですから、体験してみる価値がありそうです。そして、この制度はホストファミリーが登録をしますと世界から希望者がエントリーをしてくるとの様です。

当初この制度に登録をすることに反対でしたが、旦那さんがどうしてもという事で折れて受け入れてみたが実際にはとてもポジティブな方々で、素直な方々が集まってくれて助かったという話をされていました。

ウーハを受け入れることは、自分の家であった生活を他人とシェアすることでもありまして、自分を他人に開くことと同時に相手の世界も広がるというとても良い循環ができたといわれました。

結論

第5グループの結論はまだ話足りないのですが、全体から見えるものとして、守りに入るのではなく、自分をオープンにする、他人とシェアする、他人を許すと自分だけでなく相手も高めていくという結果に繋がるといったことを結論としたいとおもいます。

手塚

少し会場からの意見を受けたいと思います。

最後の並木さんの印象に残った言葉として、意見の代りに車座の中でのワンセンテンスを紹介していました。この言葉が印象に残ったという。そんな形で、会場から補足をする意見を出してもらおうという形で、会場とのやり取りをさせていただきます。

会場 女性 私たちの遊休農地をどうしようとしたらいいのかという事なのですが、水田を大事にして日本の原風景は水田と水と、それらがつながって最後に食があるという事ってとても素晴らしい全体会だと思いました。



稗田

第一に参加した稗田です。自分たちの地元のことを知ると、知ったうえでオンリーワンのものを作り出すという事が印象に残りました。

会場

参加して思うに、ここには若者がいない。もっと若者を引っ張り出せばこの里山も色々なことに発展していけるのだけれども。若い人がもっと出られるような工夫をしていただければと。

まとめ

手塚

まとめに入らせていただきます。私の右、1から3グループまではキーワードが重なっています。掘り起こし、気づきです。

1 グループでは現状地元の資源の発掘認証をする。戦略を磨いてどうするかを考える

2 グループでは食材がよかったことが、すでに過去になっていく。食材の重要さに気が付かないうちに食材がどんどん過去のものになってしまっているという。

3 **グループ**は1と重なって、それに情報発信が加わったのですね。地元の資源を発掘してそれに情報発信を重ねていく。この括りで1,2,3の代表の皆様、何かご意見ありますでしょうか。

金親 自信をもって、もっとやれやれという感じ

佐藤 16名が参加 ほかの箇所を知って、いかに地元の食材がもっと大事なものかを知ってほしい。

伊藤 ツーリズムが最後になる話。

コンテンツを重点に置く発信に関しては大都市圏東京とのつながりで成立する活動なので、情報伝達の方法をよほど工夫しないと考えます。いすみでは特に情報発信を重視したと。

手塚

まとめにもならないでしょうが、というか、あまりまとめたくもない。今日の討論は無理にまとめるとつまらなくなる気がするのですね。

この5人のうちで車座1,2,3が地元の資源を掘り起こそうよという意見を掛け声にして、あとは各分野でいろいろな切り口があるから問観点を見据えて、あとは自信を持ってどんどんやるということだと思います。地域という視点からは、今一番必要なことかなと個人的にも、思います。

車座1,2,3のグループのまとめとして、4と5

とは一見違うが4は1,2,3に比較的近い。というか共通する気がするのです。

見捨てられたものを見直すという点で、車座4も1,2,3と同じくくりになると理解しています。

私、そして私たちは、荒れた谷津を手入れしていますが、谷津も手を入れると色々な発見があります。

かつての農業が、昔はこうであったという事が、そこを掘り返したらいわゆる宝ものがたくさん出てきた。無茶苦茶楽しかった。今振り返ってみるとそんなに楽しいことばかりではなかったよと言われそうですが、実に楽しかった。そういう印象です。

総合的なまとめ

車座5番目の報告では「シンプルな生活」という言葉が繰り返し出てきたんですね。さらに、オーガニックの問題が出てきたところで終わりの時間になってしまったようですが。そこでは耕作放棄地とか木下さんの話が重なってくると思っています。

私も、車座5のグループにいて印象に残ったことは一杯あるのですが、その1つに「サーフィンで楽しく遊んでいる」、ことから、「何々のおかげで遊んでいられる」という、ことになり、「海からとても大きな恵みを得ていることを知る」という言葉がありました。

話は変わりますが、原発のコストも大きな問題ですが、耕作放棄地のコストの問題があります。放棄することでただ、すなわちゼロになるという事はなくて、野生哺乳類がいっぱいになる。特にイノシシが深刻です。耕作放棄地はゼロではなく

マイナスを生む場となります。さらに、そこには産廃が持ち込まれるケースが多い。原発もコストの問題がだんだんわかってきていますけれど、計



算してみたらとんでもない費用がかかっていたことが明らかになってきています。事故と絡めて二重のマイナスだったのです。

今日の話からシンプルな生き方が見えてきました。その延長線上にオ

ーガニックな世界があると感じました。

そのためにはなによりも耕作放棄地を何とかできるかできないかではなく、まず現場を見てみるという事。地元の資源もプラスの資源だけでなくマイナスな資源も見てみるという事、このマイナスをプラスに持っていくためには、発見があり、楽しくなければだめだという、ことです。どうも、4と5は、「楽しく」で括ることができそうです。

そこで、私のまとめないまとめとしては「楽しく自信を持ってどんどんやる」ということです。異論はありませんでしょうか。

よろしければ、これで総合討論を終わりとさせていただきます。

分科会の報告

里山シンポジウム実行委員会事務局 荒尾稔

里山シンポジウム実行委員会事務局の荒尾です。

全体会も8回目。分科会も今年も11の分科会が開催されます。さらに未定ですが8分科会が予定されています。分科会とは里山シンポジウム実行委員会でのいままでの位置付けでは、5月の全体会に向かって開催され、分科会で討議されたことを積み上げて全大会で議論するという事が趣旨であると事務局的には考えています。

今年は特に「東日本大震災」という事もありまして、この全大会もできるのかという事が議論された経過がございます。同時に分科会そのものも、毎年何回目として継続的に行われて来ている分科会が大震災の影響でいくつか中止となっております。

そのようなことから今回の全体会で議論されたことは、「里山と食」ということで、幅広い問題点があります。今回もまた問題提起もあってまとめ切れないという事もあるかと存じます。これから6月、7月から11月までに開催される各地での分科会の中で、全体会でまとめ切れなかった各課題を分科会の中で十分に時間をかけて議論を重ねそれを蓄えていくという流れを今年の分科会で考えていく事になるかと思えます。

里山シンポジウム実行委員会の公式HPでは、ずっとご紹介をしていますので、会員メーリング参加ご希望の方々には、参加お申し込みをいただくことで、分科会へもご参加をいただき、継続的にこの活動への参画をお願い申し上げます。

ありがとうございました。

第 8 回里山シンポジウム 分科会

分科会名	テーマ名	会場	開催日時	代表者	趣旨
里山と森林・林業	木を植える市民になろう	東京都現代美術館	7月2日～10月2日の会期中	さんむフォレスト 代表 稗田忠弘	孤高の羊飼いでよって蘇る森林の物語、フレデリックバックのアニメーション「木を植えた男」は私たちの心を揺さぶり奮い立たせる。山武の繁栄を鬱蒼と茂る山武杉の森林の姿に見て、山武林業の発展に情熱を傾けた誇り高い先人を思い出し、心の中に眠っている美しかった森林の記憶をよみがえらせながら、私たち一人一人が未来のために「木を植える市民」になろうと呼び掛ける。
里山と伝承技能	市民農園 里山伝承技術の講座	山武市成東文化会館のぎくプラザ視聴覚室	7月下旬	さんむ・アクションミュージアム 代表木下敬三	JR 成東駅前市民農園『くろ』の開設準備中です。成東駅北口は都市計画の地ですが、耕作放棄の芦原が広がります。この1部を市民農園に開墾中です。市民農園は耕作放棄対策や景観保持、都市住民の憩いの場、癒しの場になります。市民農園開設にあたりシンポジウムの開催をします。
地域の里山環境を再構築	「農法と工法」ものつくりと販売の循環。地域の市民の自立した事業	Qiball (きぼー)を予定	10月上旬ころを予定	里山里海自然づくり事業をする会 代表 荒尾稔	若者の雇用になる仕組みに構築する、積算根拠をもとに資格取得により医療(個人)、福祉(人の集団)同様に若者が、環境(地域や国土や地球)への関わりを仕事として取組めるように。 里山の再生に事業者ベースで実践活動として取り組む。集落単位での「冬期湛水不耕起栽培」農法。2000年以上継続している石積工法+「ランチブロック工法」などによる河川や用水管理技術。水確保のため池や井戸の再構築など。これからの地域再生に欠かせない技術再構築の生物多様性、将来性、採算性を検証する。 「里山里海自然づくり事業をする会」を中心にして、各地の農業・福祉・建築などを複合的に取り組み、過去20年以上の構築実績と実証済みの無農薬農法や石積工法を中心に、横断的に組立て運用される技術の地域再生への提案と意見交換
里山と森づくり	土砂採取跡地の森復元	千葉市緑区小山町観音地及び周辺	5月28日 11:30-13:00	千葉市板倉大椎土地改良区/緑の環・協議会代表 石谷栄次	昨年に引き続き、今年は小学生の皆さんと一緒に育てて来た苗の植林と平和のシンボル被爆アオギリ二世の並木造りで「グリーンウェイブ運動」に参加。国際生物多様性の運動と、今年は日本中、世界中の人と国際森林年をお祝いします。震災と原発の被害が広がる中で、被爆アオギリの並木をつくる試みと森づくりをしながら、子供たちが基地作り、池で泥んこ遊び、たき火・火遊びなど凡そ学校や公園では体験できない遊び場として、森づくりパークについて話し合います。
里山と医療・福祉	県内6ヶ所で森林療法(セラピー)	県内各所	2011/4/17(日) 中止 5/15(日) 開催済み 6/12(日) 9/18(日) 11/20(日) 012/2/12(日)	代表 赤城建夫 林みね子	障がいのある人も無い人も、森林の中を皆で時間をかけて歩くことにより、リラックス&癒し効果を得られる内容のプログラムを実施いたします。 船橋県民の森 中止 清和県民の森 開催済み 館山野鳥の森 東庄県民の森 大多喜県民の森内浦県民の森
里山と竹	竹林整備の必要性	四街道市中台「赤い花と白い竹園」	8月13日(土) 13:30～15:00	NPO 法人 竹研究会 代表 田代武男	当研究会は平成18年設立後、竹の特性研究と竹の有効利用を考え「竹林セラピー」を提案。竹林は日本人であれば、一度や二度、竹の葉のサラサラと擦れあう音や竹の葉の青々とした美しさは、森林に勝とも劣らない癒し効果があり、竹を竹林セラピーの対象として提案。 また竹の価値を高めて、アジア特に中国から大量輸入を抑える競争力ある美味しい「たけのこ」の開発が必須と考え、

					「黄金たけのこ」を商品化。えぐみなく、歯ごたえ良く、軟らかく生も食べられ美味しいと評価を得る。これを商品化して竹を有利な換金商品として生かして農家の手入れ促手法。
里山とフィールドミュージアム	第3回・三番瀬フィールドミュージアム観察会	問い合わせ先 佐藤	/3/20(日) 3/21(祭) /6/17-1週間 7/18(日) 8/28(日) 10/15-16	三番瀬フィールドミュージアム 代表 佐藤聡子	及び は、東北関東地震にて中止に。 6月18日から1週間縄文時代と海辺を繋ぐ千葉県立中央博物館と飛ノ台史跡公園博物館 7月18日(日)植物と昆虫の観察会千葉県立中央博物館(専門家)三番瀬の砂浜 8月28日(日)箱眼鏡デ海の中を観察!谷津干潟ミジンコ倶楽部協力 三番瀬の海 9月or11月(予定)プランクトンの観察会、秋の底生生物の観察会、谷津干潟ミジンコ倶楽部協力、千葉県立中央博物館、三番瀬の砂浜 or 江戸川河口 10月16日(日)秋の川・森の観察会(財)日本生態系協会千葉県立中央博物館海老川-金杉の森へ 12月4日or11日 三番瀬冬の観察会 千葉県立中央博物館、千葉県野鳥の会 三番瀬とつながる7000年前、飛ノ台貝塚と縄文人のくらしと文化とき
里山とキャンプと里山計画を語ろう	里山の山菜を食べよう	「わたしの田舎」谷当工房&谷当グリーンクラブキャンプ場	2011年5月3日(憲法記念日) 10:00現地集合~16:00	谷当里山プロジェクト 佐藤 谷当工房	谷当里山計画を語ろう! 谷当町の環境は、千葉県若葉区のおくに位置する里山の原風景のあるところです。周辺には、東京情報大学・川村記念美術館・歴史のみえる御成街道・千城台住宅街。千葉駅からバス40分(450円)・東京駅から高速バス60分。終点御成台から徒歩15分。万歩計お持ちの方、最適な里山散歩ができます。
森のお茶会	「森の活用」	下泉・森のサミット	2011年5月14日(土)	下泉・森のサミット 鈴木 優子	5月14日に開催されました
里山とまちづくり	里山を生かしたまちづくりワークショップ	会場未定	2011年7月中に開催をする。	亀成川を愛する会事務局 小山尚子	都市近郊にある里山を保全するためのシステムの模索と手法の実施。都市近郊の里山は、荒廃と開発圧力、両方の危機にさらされている。市民参加と地元理解による協力が欠かせない。また都市から緑豊かな農村への中継地として、緑のコリドーを確保することが緊急の課題となっている。これまでの活動団体事例を参考に行政、市民、企業を巻き込む活動とする。
里山と生物多様性バンキング	里山バンキングを考える	会場未定	2011年7月中 2011年9月中 2011年11月中 全3回を計画。	東京都市大学大学院環境情報学研究所中章研究室 久喜伸晃	自然環境保全の新しい仕組みを導入するために勉強会を開催します。里山バンキングとは、どうしても開発で壊れてしまう自然をあらかじめ他の地の里山生態系の保全や復元活動などを通じてバンキングしておいて(クレジット創出)、これを開発の場で失われる自然と相殺し埋め合わせる(オフセット)ことで、地域の自然環境の総量を保つための一助とするシステムです。経済的なメリットも得ながら、里山の持続的な維持管理と生物多様性の保全をめざします。

日程・内容の詳細が決まっていない分科会

確定次第、順次、里山シンポジウム公式HP上で公表していきます。

分科会名	代表者	分科会名	代表者
里山と野生動物	中野 まきこ	里山と政策	小西 由希子
里山と里海	手塚 幸夫	里山と水循環	桑波田 和子
里山と残土産廃と空散	井村 弘子	里山と生物多様性	加藤 賢三
里山と農業	金親 博榮	里山と東日本大震災	木下 敬三

里山シンポジウム全体会 パネル展示団体（展示場所：玄関ホール）

no	内容	団体	担当者
1	里山と生物多様性バンキング	東京都市大学環境情報学部 田中章研究室	磯山知宏、萩谷拓郎
2	三番瀬フィールドミュージアム in 飛ノ台	フィールドミュージアム・三番瀬の会	佐藤聡子
3	活動団体	八千代市ほたるの里づくり実行委員会	桑波田和子
4	社会的事業者等訓練コースの受講者募集	NPO 法人千葉まちづくりサポートセンター	栗原裕治
5	活動団体	NPO法人ちば里山センター	金親博榮
6	活動団体	谷当グリーンクラブ	金親博榮
7	活動団体	下泉・森のサミット	伊藤博子・渡辺栄一
8	生物多様性に関する公開シンポジウム	東京情報大学	原慶太郎
9	活動団体	さんむ・アクションミュージアム	木下敬三
10	里山条例、国際森林年等	千葉県森林課	西野文智
11	里山里海の生態系評価とCBD・COP10報告	千葉県生物多様性センター	中村俊彦
12	活動団体	里山里海自然づくり事業をする会	荒尾 稔
13	活動団体	さんむフォレスト	稗田忠弘
14	被災地支援報告	牛8仲間	手塚幸夫
15	夷隅郡市の自然から	夷隅郡市自然を守る会	大藪 健
16	活動団体	NPO 法人千葉自然学校	遠藤陽子

閉会のご挨拶

里山シンポジウム実行委員会副代表 栗原裕治

第8回里山シンポジウムの全体会は、これをもって終了致します。午前10時からの長丁場、皆さんお疲れ様でした。今回の全体会の開催に際しては、夷隅郡市の皆様に随分お世話になりました。



ありがとうございました。

最後に少しばかり、私の感想を述べさせていただきます。里山シンポジウムは、今回のような全体会、そしてメンバーの自発的な分科会によって構成されており、私たちはこの8年間、里山を取り巻く地域のさまざまな課題について見聞し、さまざまな角度からその課題解決を模索してまいりました。そして、里山の課題は、いろいろな関係性の中で生じているものであり、都市をはじめ河川流域、里海など里山を取り巻く広い領域に視野を広げるとともに、私たちの価値観や生活を見直す必要を強く感じるようになってまいりました。

そんな中で、3月11日の東日本大震災は、大きな警鐘と感じています。これからの里山の課題の解決には、この震災で犠牲になった方、被災し現在も苦労している方々の不幸を無駄にしないという私たちの「思い」と「覚悟」が必要だと思えます。

戦後の高度成長の時代、私たちの先輩や私たちは、国際社会に打って出ること、安定的な豊かさを享受するには輸出産業が重要だと、経済中心で動いてきました。この時代の日本人の選択は間違っただけではなかったと思いますが、同時に日本社会は大切なものを置き忘れてしまったように思います。その大切なものとは、自らの生活について自ら考え、自ら決断して仲間とともに行動していく、私たちそれぞれの「姿勢」ではないでしょうか。

横文字が嫌いな人もいると思いますが、「イノベーション」という言葉があります。技術革新とか創意工夫などと翻訳されることもあります。この「イノベーション」は、社会の発展や安定のためにさまざまな分野において常に必要なものと云われています。しかし、私たちは「イノベーション」を大きな企業とか産業界に任せて、自分たちの身の回りの創意工夫について昔ほど深く考えない習性が出てしまったように、私自身を振り返ってみて思います。社会の動向に流されることが多いというか、賢い消費者にはなったように思いますが、身近な生活の中で、ルールに乗っかったような受身の行動がほとんどになっていないでしょうか。

3月11日をきっかけに、私たち一人ひとりが昔のように身近な「イノベーション」について取り組んでみては如何でしょう。里山の課題を解決するには、身近な資源を有効に活用する必要がありますが、最も重要な身近な資源は人間であり、それらがつながることによってお金が余りかからないリーズナブルな「イノベーション」を達成できるような気がします。

付け加えるならば、「イノベーション」は、私たちにとって負担ではなく、ワクワクするような楽しいことではないでしょうか。地球に誕生したホモサピエンスは、気の遠くなるような時間の中で「イノベーション」を繰り返しながら現在を創り出しました。私たちの遺伝子というか、人間の本性の欲求の中に「イノベーション」の達成が組み込まれているに違いありません。身近でこんなに楽しいことを産業界や行政に任せてしまうのはもったいないと思いませんか。私たちが身近な「イノベーション」を意識し、行動するだけで社会は大きく変わるように思われます。

来年も是非、第9回里山シンポジウム全体会を開催したいと考えています。里山シンポジウム全体会がきっかけになって、多くの人のつながりが生まれ、それが身近な「イノベーション」の達成につながることで、それが新しいライフスタイルの広がりになること願って、閉会のご挨拶にさせていただきます。

ありがとうございました。

「メモ欄」

第8回「里山シンポジウム」報告書

2011年度のテーマ

「里山里海と食」 - 夷隅^{いすみ}の根っこから元気に

2011年7月27日 (Ver3-2)

発行：里山シンポジウム実行委員会・千葉県・NPO法人ちば里山センター
いすみ市

編集：里山シンポジウム実行委員会 <http://www.satochiba.jp>

編集担当：荒尾 稔

事務局：株式会社 トータルメディア研究所 内

113-0021 東京都文京区本駒込 4-38-1

Tel . 03-3824-6071 Fax . 03-3824-5980

E-mail:minoruarao@tml.co.jp <http://www.tml.co.jp>

全体会 会場写真

